
怪異犬 カイイヌ

一九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪異犬 カイイヌ

【NZコード】

N4084BA

【作者名】

一九

【あらすじ】

死んでしまった飼い犬のサヤに取り憑かれてしまった主人公は、正しくサヤを御払いをして、供養するべくオカルト研究会に属していた。しかし中々サヤは離れず、むしろ主人公は更に様々厄介事に巻き込まれていく。といった感じのお話です。学園物ですが高校ではなく大学が舞台で、オカルト要素やハーレム要素有り。少々世間離れした主人公たちの奇つ怪学園痛快ファンタジー！だと思います。どうか気張らずに、暇なときに読んであげてください。

1 (前書き)

僕、ハケ岳一刀は、今でこそ非生産的で自堕落な大学生活を送っているものの、高校時代は向かうところ敵なしの優秀な長距離ランナーだった。

どれだけ走つても疲れない。どれだけ速く走つても疲れを知らない。

体力だけが自慢の、走るためだけに生まれてきた男であった。

しかし、一年前。僕は突然疲れた

走つても走つても尽きることのなかつたスタミナは、徐々に衰えを見せ始め、僕は完全に疲れてしまった。

走ることが出来なくなってしまい、体力だけが取り柄だった僕は恥じることが多くなった。

だから僕は、止まった。

走ることを辞めた。

だけどそれは仕方のないことだったのだ。

実家で飼っていた愛犬のサヤが死んだのは、丁度一年くらい前だつた気がする。

気がする。と言うのは飼い主の一人として如何なものか。

愛犬家の方が聞いたら「愛犬の亡命田くらい把握して当然だろう」と、怒られてしまうかもしれない。

しかしあのワン公は何故か、家族の中で唯一、僕にだけ懐かなかった。よく家族の中で年齢が一番下の者を、犬は自分より下に見る。と聞くが、妹の一音にはよく懐いていた。

つまるところ僕はあまり犬が好きではなかつた。

犬は他の動物よりも人間に従順とか聞く。

それはそうされた人達の意見であり、ステルス・マーケティングだろうと僕は信じている。

季節は寒い寒い冬だつた。僕が初めて碓氷メリアと出会つたのは寒空の下であつた。

クリスマス色ーとでも言おうか。街の街路樹に張り巡らされた煌びやかな光の装飾は、僕の弱小な瞳には少々眩しいくらいであつた。師走も十七日目に突入して いた。

大学での講義の受講を終え、凍てつく寒さの中、僕はアーミーコートの左右のポケットにそれぞれ両手を突っ込んで、薄れたカーキ色のブロツクが所狭しと並べられた歩道を歩いていた。

まったく、夏の暑さというのは我慢さえすれば何とかやり過ごせるものだが、なかなかどうして。冬の寒氣には耐えようにも、絶え

そうである。

最近は毎日のようじにてして厚手のパークを羽織る寒さであったが、
今日の寒さは格別。

別格。

段違い。

お門違い。

お天道様が顔を覗かせていないのも理由の一つだが、前進を遮る
ように全身を包み込む寒風も乗じて、冬将軍は僕ら歩行者に、物理
的な寒さを与えていた。

暫く下を向いて歩いていると、ちゃんと、深緑色のアーミーパー
トに白い結晶がふれた。

空を見上げる。

曇天だ。

さんさんと、降雪である。なるほど、これも僕がいつにも増して凍
えている理由の一つか。

聞けば、来週はクリスマスとかなんとか。

神仏混合信仰宗教の日本人が、キリストの生誕に祝詞を挙げるなど、
笑止千万である。

そんな事はいざ知らず、擦れ違つカツフルは素敵なホワイトクリ
スマスを迎えるのである。

蜜月な関係の男女から見れば、この光景はロマンチックなんていう
安い言葉で片付けられるのだろう。

だが冗談じゃない。

こんな光景はただただ僕の昂揚を冷ましていくだけ。
冷めるのは身体だけで充分だ。

震える唇を噛みしめ、僕は駅へと続く帰路を歩んでいた。

また暫く歩いていると、薄れたラーメン屋の前の赤信号につかま
つてしまつた。

僕は信号は嫌いだ。理由は今は述べないけど。

「あのう、すみません」

ポケットの中の手を吐息で暖めようと出したその時。

ミドルカットがよく似合つ彼女は、まるで食えた狼の檻の中の向うよりこ、弱々しく僕に話し掛けてきた。

恐らく、彼女は僕と同じ大学に通う生徒である。この道は大学から駅に向かう最短ルートだ。こんな田舎道を若い人間が歩いているとしたら、それは九割方、僕と同じ大学に通う生徒なのである。

見ると僕を見上げている彼女の顔は、一七五センチある僕の胸辺りに位置していた。

小顔で童顔気味、透明な肌には薄く軽いメイクをしていた。

目は少々垂れ目だが、パッチリとしている。首にはクリーム色のマフラーを巻いており、ヘッドフォンをほつぺたにずらしていた。

評して中々可愛らしい女子おなじであった。

こんなに可愛いらしい女の子がどうして、僕になんか話しかけてきたのだろう。

・・・ははん。分かつたぞ。

つまりあれだ。

聖夜を共にする筈だつた彼氏に聖夜直前に振られてしまい、もう誰でもいいからちゅっちゅしたい！と欲望剥き出しで迷走していた矢先に、独り寂しそうに歩く僕が居た。というわけだな。

うんそうだ。そうに違いない。

僕の容姿を後ろ姿だけで判断してしまつたのは判断ミスだつたな。

まあ如何なる不純な理由があるにせよ、話しかけて来た女の子に素つ気のない態度をとるほど、僕だって野暮じやないぞ。

「なにかな？」

「えつと、社会学部の一年生、ハケ岳くん・・・だよね？」

・・・ほう。この女子。僕の事を知つていて話し掛けてきたのか。と、するとどうだらう。

僕が先程考察した、この子が僕に話しかけてきた理由からすると、この子は僕に興味がある。付き合いたいとおもつているんじゃないだろうか。

そうだ。そうに違いない。

大学に入つてハケ月。ようやく僕にも春が訪れたというわけか。しかしここは無難に、慎重に、女性慣れしていないことを悟られないうに接さねば。

僕が所属しているオカ研にも一人、女の先輩が居るけど、あれは女性としてはノーカウント。ノーカンだ。

電話帳の中に入っている女性の数を友達と争うときに、自分のお母さんや妹を数えないカウントしないのと同じである。

・・・まあ最も、そんな機会は一九年間の人生で、ただの一度も無かつたわけだが。

しかし、僕は僕の身体の中に微かに漂う春訪れを確實に感じていた。

「ただけど」

「ああ、やつぱり！良かつた。生で見ると全然違う人みたいなんだもん」

そういうて彼女はなにやら学生証らしきものを差し出してきた。

・・・というか、僕の学生証だった。

勘違いもここまで行き過ぎると唯唯煌びやかである。

彼女はただ単に僕が落とした学生証を拾つて、僕に届けに来てくれただけのことであった。

なんとまあ、僕は素晴らしいポジティブな勘違いをしてしまつていたもんだ。

心の中の声とはいえ、数秒前の自分の心の口を針金で縫いつけたい気分だ。

「ありがと」

そういうて僕は彼女から学生証を受け取るつと、学生証を掴んだ。が、彼女は学生証を握る手に力を入れ、学生証から手を離そうしない。

顔を見るにこやかな表情で首を傾げていた。

いや、いやいやいやいや。

えつ、なに? どうしたの?

なんなのこの子? 僕はどうすればいいの?

困惑する僕の表情を閲覧して悦に浸るかのように彼女は満面の笑みで微笑んでいた。

とりあえず僕も笑顔を作りながら、力をいれて学生証を引っ張つてみた。

が、何故か彼女から学生証が奪い返せない。

いや、彼女はなにも僕の学生証を奪ったわけではない。

だからこの場合は、取り返せないか。

いやそれも違うな。拾つてもらつたんだから・・・貰い返せないか?

僕が悠長な事を考えていると彼女は唐突に指を離した。

「ハケ岳君。ありがとうなんて言いつつも、心の中では不純なことを考えていなかつた?」

ギクッ

生まれて初めて僕は自分からギクッなんて擬音を耳にした。良い体験をさせてもらつた。

図星である。

しかし何故、彼女は僕が不純なことを考えている(正確には不純なことを考えているかもということを考えていたわけだが)ことを見抜いてしまつたのだろうか。

つといかんいかん、今は彼女からの僕への信頼を回復せることの方が先だ。

「や、やだなー。そんなこと全然思つてないよー」

思つていた。

「ふーん。ま、いいけどさ」

彼女の顔からはいつしか微笑みが薄れ消えており、代わりに訝しげな表情をしており、僕を睨んでいた。

「うん。そんなこと、僕はこれっぽっちも考えていなかつたよ。そ

れより拾つてくれた君に対する御礼の言葉で脳内が埋め尽くされたよ。今、僕の名前で脳内メーカーで占えれば、確実に『謝々』で埋め尽くされるよ」

そう言いながら僕は財布の中に学生証をしまった。

「なんで中国語・・・」

彼女は先程の怪訝けげん そうな顔から一転、今度は嘘みたいに明るい表情になつた。

感情がルービックキューブみたいに激しく入れ替わる子だな。

「嫌だなあ。ハケ岳君。私が人の手の中で廻されるつて言いたいの？」

彼女は少し苦い顔をして笑つていた。

「む。僕は知らないうちに脳内言葉を口に出してしまつていたのか。だとしたら失礼千万だな。」

「いやいや、そういうことじゃなくてだな。つとそうだ、まだ名前

聞いてなかつたよな？」

「碓氷うすいだよ。碓氷メリア。石偏に舊鳥ふるとりが氷るつて書いて碓氷うすい。メリ

アはカタカナね」

メリアか。

日本人としては変わつた名前だ。ハーフだらうか。

そういうえばどことなく欧風な雰囲気を匂わせている。

頭髪もアジア人特有の染めあげて黒みのかかつた金髪とは違つて、艶やかな金色は一本一本が輝いている。

・・・よく観てみると、彼女は身長は少々低いものの、コートの上からでも分かる程の蠱惑的こわくてき的な体型をしていた。

胸部は大きく膨らんでおり、ウエストは引き締まつている。ヒップは程良い大きさをしていて、太ももは寒空の下、曝け出されていた。カーキ色のコートとタッグを組んで、絶対領域を作り出している黒のロングブーツは、スラッシュとカモシカのようにのびていた。ハーフだとしたら何処の国だらうか。

僕がそんなことを考えていると

「あ、お婆ちゃんがイタリアの人らしいの。だからクオーターかな？」

と彼女は恥ずかしそうに、曝け出された太ももを隠しながら口を走らせた。

さつきから僕が思つてゐる事を読んでいるかの如く、悟つてゐるかのように、彼女は自己紹介した。

会話は楽だが、なんというか

見透かされてしまつて、非常にやりづらい。

それに、らしい。とはどういうことだらう。

しかし、そこはオ力研の先輩の受け売り。人は触れられたくない部分を、グレーにするのだ。

曖昧に。微妙に。靄をかけて喋るのだ。

ならば僕も深くは追求しないのが。紳士といつものだらう。

「あーイタリアの。どうりで、純粹な日本人にしては珍しく綺麗に髪が染まつてゐるなあと思ったんだ。それによく見てみれば碧眼なんだな。僕、生まれて初めて生のブルーアイを見たよ」

「私の瞳をそんな目に良さそうな健康食品名みたいなので例えないで！」

いいツッコミだ。鋭い目付きだ。

それにしても彼女は綺麗な瞳をしている。

クオーターと言つてはいたが、なるほど、純粹な碧眼ではなく、少々濃いブルー、深遠の海の色。

それはまるで、何もかもを引き込む海底の奥底の入り口のような色をしていた。

「あ、えつと」

彼女は恥ずかしそうに顔をクリーム色のマフラーに埋めた。

しまつた。いくら瞳が綺麗だからといって、初対面の男性に、しかも僕みたいな無粋な男に見られてしまえば、誰だって嫌だらう。自分の気の使えない性格に嫌気が差してしまつ。

こんなことだから、十九年間も生きてきて彼女の一人も出来ないの

だらう。猛省しなくてはな。

「おつと、「じめん」

僕はそう言つと彼女の瞳から田を背けた。

しかしどうだらう。

ビューティーフルなんていう英単語は、恐らく生きていても今後使うことがないであろうと思っていたが、彼女の瞳にその英単語は適材適所ではないだらうか。

見れば見るほど引き込まれそうな深淵の青。

日本の色表現では表現出来そうに無い、実に美しい色彩であった。いや、瞳だけではない。

本来、学生証なんてものを拾つてしまつたら、学務課に届けてしまえばいいことだらう。

しかし彼女はそれをせすに僕に直接届けてくれた。

見ず知らずの僕に。

彼女の瞳が綺麗なのは、なるほど心の清らかさも反映しているのではないだらうか。

性格は顔に出る。と言つが、彼女はそれが瞳に映し出されている。内面の美しさが滲み出でているのだ。

話しかけてきた彼女を一目見ただけで、男に餓える雌猿とか、僕はそんな愚考に到つてしまつた愚鈍な自分を殴り飛ばしたくなるな。感謝の意と罪悪感が混合する僕の脳内では、何かも解らぬ感情が沸点に達していた。

「えつと、じゃあ僕はこれで」

湧き上がる、いや、沸き上がる気持ちを冬の寒風で醒まし、その場を立ち去ろうとしたその時。

「まつて、ハケ岳君。駅に向かっているんでしょう?・なら駅まで一緒に帰ろうよ」

お話していく?と彼女は続けた。

これは、大歓迎だ。

罪悪感に悩まされる僕の煩惱は一気に吹き飛んだ。

しかしどうだろ？。

女性慣れをしていない僕がこのような状況になるのは、守備固めで一軍に呼ばれていたのに、突然ここ一一番の場面で代打に抜擢された野球選手のような気分である。

だいたい、気兼ねなく話していたが、一体彼女は何年生なのだろうか。

もしかしたら就職を間近に控えている四年生なのかもしれない。だとしたら普通にタメ口を聞いたらやつたよ。

「あ、えっと」

僕がどもつて「僕がどもつて」と、彼女は見かねたように口を開いた。

「あ、気とか使わなくて良いからさ！ それと私もまだぴちぴちの一年生だよ。ハケ岳君とおんなじ」

そう言つと彼女はここにこと笑顔を見せてくれた。

既に入学してハケ月が経とつとしているのに、ぴちぴちといつた表現は如何なものか。

でもまあぴちぴちなのであらう。主に、肌とかが。

「そつか。じゃあ帰らう。えつと、なんて呼んだらしいかな？」

「メリ亞でいいよ。私もハケ岳君のこと、なんて呼んだらしいかな？」

？

「ああ、僕も下の名前で呼んで欲しいな。だいたい僕、ハケ岳って名字、気に入つてないんだよな。カツコ悪くつてさ」

「どうして？ ハケ岳って確かに地名性だよね？ 確かに珍しい苗字だけど、そこまでかつこ悪いつてわけじゃないんじゃない？」

「いやいや、確かにそうなんだけど。イメージの問題かな。『ハ』は兎も角。『ケ岳』がどうもね。なんかこの、筋肉を連想させる」つついイメージがあつて」

「うーん。わからないなあ。私としては三文字苗字ってだけで随分と垢抜けていると思うけど・・・」

垢抜けている苗字。初耳である。

「わからないかな・・・まあ。」この話で同意を得られたことは無いんだけどな

「ないんかい」

吉本新喜劇顔負けの絶妙なツツコミが僕の胸を突いた。

「それを言つなら、碓氷だつて中々垢抜けている苗字だと思つぜ」

氷とか入つてる時点で。

「碓氷・・・ね。かつこいいよね」

「？」

なぜか彼女は、あくまで他人事のように自分の苗字を贊美した。なぜだろうか。僕はこの時、踏んではいけない物を踏んでしまった気がした。

苗字。先祖代々受け継がれる、血縁の証。

一般庶民が武士と同じように苗字を持ち始めたのは、廃藩置県の後だと。

大政奉還後。日本では自由に、好きな苗字を名乗る事が許され、それまで名だけであった一般庶民達は「こそつて自分の苗字を考えたそうだ。

深い理由があるように見せて、存外、至極簡易的な理由の苗字も多々ある。

僕の場合は、ハケ岳。

地名性である。

長野県の東部に位置するハケ岳連山が恐らく語源であろう。

富士山との背比べに僅差で勝ち、富士の山に鎮座する木花咲耶姫このはなさくやひめを憤慨させ、叩かれ、ハつに砕け散つた哀れで無様な連山である。

そんな理由もあつて僕はあまり、この苗字が好きではないのだ。

苗字の話の後は暫く沈黙が続いてしまつたが、少し経つとまた彼女は氣さくに話題を振ってきた。

彼女は話し上手というか、聞き上手で、駅までの道程は話題に困ることは無かつた。

こつもは長く感じるのは帰り道も、何故かこの田舎、ともかくとも、とても短く感じた。

憑依。

とはなにかご存知だらうつか。

地域や時代によつては、憑靈、かんりま神留、かんりま神宿り、神降ろし、神懸り、

口寄せとも呼ぶらしい。

亡靈、

妖怪、

妖獸、

神様もののか、人外ひとほか、人ではない者達。

この人外共に共通することは全て、何かしら強い念を持つてゐる
ということだ。

強い想い。

それは時として

愛であり、

憎惡であり、

思想であり、

夢であり、

妄想であり、

夢想なのだ。

回りくどい前置きはここまでにして、ここから腹をくくつて、首
も括りそつた本題を話そつ。

世間は荒唐無稽だと笑うかも知れないが、昨年、奇しくも僕は憑
依された。

美しくて、愛しくて、女々しくて、

壯麗で、綺麗で、端麗で、

煌びやかで、雅やかで、艶やかで、

魅力的で、幽玄的で、耽美的で、

儻^{けん}げで、優雅^{らんじょう}で、靈妙^{れいみょう}で、

絢爛豪華^{けんらんごうか}な白い体毛をした犬に憑かれてしまった。

僕が持つて いる^そい し い語彙をここまで並べてみても、その美しい

毛並みを文字で伝えることはかなり難しい。

それ程まで、白^{しら}なのだ。

憑依^{いいたき}の頂^{つくも}、九十九神^{つくもがみ}の色、神の色。禁色。

そんな白い犬に僕は取り憑かれてしまったのだった。

「なにかおいます」

部屋に入るなり、そいつは僕の衣服に鼻を近づけて言つた。

そいつは、見た目は僕と同い年くらいの女の子で、冬だというのに真っ白で布地が薄いワンピースを着ている。

両手首には、もふもふとしているシュシュらしき物を付けていて、白い頭髪は、十回程度ストレートパーマを掛けたのではないかとうくらい真っ直ぐで、もうこう肋骨の辺りまで伸びていた。

尾っぽこそ生えていないものの、頭部に生える二つの獸耳が、彼女の正体を物語つていた。

「なにがだよ。別に今日は変わったことは無かつたぜ？」

「ご主人。においがします」

ジト目で、テンションの低い声のまま指摘される。

ああ、メリ亞と駅まで一緒に帰ったからか。女性の匂いがするのだろう。

まあ僕が誰と帰ろうが、何をしようが構わないで欲しいが、こいつにとつてはそもそもいかないのだろう。

寄生している樹木が倒れてしまえば、宿り木自体も死んでしまうように、僕に何かあつた時に一番困るのは、こいつなのだから。

一年前。この世から旅立つていた我が家の番犬。愛犬。家族。サヤ。

サヤは死んでしまった。筈だった。

しかし、サヤは今こうして僕の眼前に半人の姿で、犬神・さや叉夜として、人語を喋り、一本の脚で立つていて。

そう。僕は一年前に昇天した筈のこいつに憑かれた。

叉夜は、死んでから僕に懐憑いたのだ。

『憑依』と呼ぶのだと、オカルト研究サークルのあの胡散臭い女の先輩は教えてくれた。ただ何故僕に憑依したのかは先輩もわからな

いと書いていた。

まつたく、一度死んだくせに、まだ長々と顯世に面座つてこぬといつ。とつと常世へと旅立つてましいものである。

僕は力と幽霊が嫌いなのだが

幽靈ではなく、私のしゅぞくは神獸しんじゅうです。犬神です。あんなやつらと一緒にしないでください。

と、毎度又夜に言われてしまうが、僕からしてみれば又夜は、十分に幽霊としての格は越えていた。

いや、幽霊としての合格ラインなんてものが存在する前提で話すのも、なんだか可笑しなものだが。

要するに、これは、いや彼女は一度死んで、再び神體として蘇ったのである。

「大学には女子も沢山いるからな。それで匂いがついてしまつても仕方のないことだろ。それともなにか？お前は僕が女の子と仲良くするのを許せないのか？まつたく、嫉妬は簡便だぜ？焼くのは餅じゃなくて」

「いえ、ちがいます。ご主人」

僕の言葉を遮つて、又夜は勉強椅子に座りながら喋り始めた。

サヤは尖った耳をピクピクと動かし、伺うように僕を見た。

「主人、私がいっておるにあらがふとば、そのままのいみでは

卷之三

「ふざけないでください。このままよ。

又夜は表情一々變えず
床に座二てしる僕の肩に
組んだ足を乗

僕は直ぐ様乗つけられた足を、肩から勢い良く振り落とした。

良い身分だ。このワン公。本当に僕の事を「主人だ」と思つてゐる

「尤斐·仁澤」

足を振り払われてバランスを崩したサヤは、そのまま椅子ごと床に倒れた。

わがむねN

うーいたたたた・・・なにをするんです!!

ふむ、興奮したからつて語尾にワンが付いたりすることはないのか。
「お前こそ、ご主人様に向かつて何しやがる」

僕に低いトーンで答えた

はだけたワシنبيースから色の白い太ももが、顔を覗かせていた
「むむむ……動物ぎやくたーですっ！ 動物愛護団体のかたが

「うけいをみたら、ご主人は死刑にしょされます！」

「 どうか。僕は死刑になるのか。じゃあ心置きなく余生を堪能しな

そう言つと僕は転んでいた又夜の両足をがつちりと掴み、勢い良

く開脚させた。

「國語」卷之三

「今日は薄いピンクかどけセリハコで、主人様はハンドを見られて興奮しているのだろう? またイヤラシイ雌犬め! 」

僕が言い終わるとほぼ同時に、又夜は上手く体を捻らせ、僕の

右手首に喰み付いてきた

[卷之三]

今は人の姿をしてしまって、元は大である。咬み合せる力は健在である。僕の右手首の痛覚は悲鳴を上げた。

「離せ・・・」の「一」

ガチン

又夜の上顎と下顎が勢い良く閉じる音が部屋に響いた。

憑依された人間には、人外並みのメリットと、人並み外れたデメリットが出来てしまうそうだ。

ただこの場合、人外並みのメリットというのは、あくまで人外であればメリットになるくらいの話であって、普通の人間を目指す僕にとっては、このメリットというのは只々デメリットでしかない。

憑依されて良いことなんて何一つ無いのだ。

犬神に憑依された僕のそのメリットは、身体を自由に幽体化させることが出来る。

そこに居るのに、そこから居なくなることが出来る。

存在感が薄い人ことを、影が薄いというが、僕の場合は完全に影が無くなる。まさに人外の極みである。ビバ人外。人外中の人外。そして、今まさにその能力を駆使して、叉夜の咀嚼を免れたとうわけだ。

叉夜は勢い良^{さす}く空氣を噛んでしまった形となつていたので、少々頸を痛そうに摩つていた。

「むー。『ご主人。むやみに能力をつかわないでください。わたしのMPがへります』

「お前のMPが消費されるのか！？」

勿論そんなことは無い。

「で、ご主人」

叉夜は乱れた髪を搔き分けて整え、床にあひる座りをした。犬なのに。

「わたしが言つているのは、人間のおんなのにおいがするという意味ではありません」

「あん？ ジヤあどういう意味だ」

「きょう、わたくし以外の憑依とかわりませんでしたか？」

「いや、今日僕が関わったのはコンビニの店員とか、女友達くらいだぜ？」

「うそおつしやらないでください。『ご主人にともだちができるわけありません』

・・・なんだ』『いつ。

「いや、今日帰り際に僕が落とした学生証を女の子に届けてもらつてさ。その子が中々良い子で、友達になつたんだよ」

「ふん。そうですか」

叉夜は何故か不機嫌そうに口を尖らせて、体育座りに座り直した。

落ち着きの無い犬だ。

「そうだな。でもちょっとその子が変な子。って言つちやうと失礼かもしれないけど、変わった子でさ。僕が思つてることや次に喋らうとしていることを先読みしていいるかのようになんでよ。僕としては楽だったけど、なんというか、脳内を見透かされているようだつたよ」

「ご主人のあさはかな脳内なんて、わたくしでもみすけますみすけますつてなんだよ。日本語としてあつてゐるのか、それ。

「ふーん。じゃあ今僕は何を考えている?」

「わたくしのぱんつの色でしょ!」

「くつ、何故わかつた!」

「ご主人、まじへんたいですね。しょつけいに達するれべるです」

「そうか、僕に憧れていののか」

「ご主人、憧憬でなほく、焼鶏です」

「焼き鳥かよ!!」

内容の無い会話だつた。

「でも、そうですね。わたしはあまり自分以外の憑依に詳しくはないので、あしたあたりまた、おかると研究さーくるさんに顔をだしてみてはどうでしょう」

僕は分かっている。こいつはただ単にオカ研の先輩が叉夜にお土産に。つてくれるチョコパイが目当てなのだと。

見ると叉夜は真剣な目付きで、涎を垂らしていた。汚いなあ。

「お前はどうせチョコパイ目当てだらう。涎がこんなにちはしてるぞ」

「な、なにをおっしゃるんです!ご主人!わたしはご主人のほしんを案じてですね!」

涎をもふもふしたシュシュみたいなやつで拭う叉夜。

「あーわかつたわかつた。じゃあ明日、講義が終わったら行つて聞いてみるよ」

嫌だなあ。オカルト研究サークル部室。あそこは何回行つても薄気味悪い。

部屋が薄気味悪いだけならば、まだ僕の順応性も否が応でも高められるものの、僕はあの先輩が苦手なのだ。怪しく、胡散臭く、態度らしく、如何わしく、掘みどりがなく、ペダンチックな、あの女の先輩が僕は苦手なのだ。

「ではご主人、あしたはわたくしも同伴します。よろしいですね」又夜はにつくりと笑つてみせた。

・・・なんだと？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4084ba/>

怪異犬 カイイヌ

2012年1月14日22時54分発行